

大妻女子大学博物館の施設と所蔵資料を活用した

大学教育の可能性に関する基礎的研究 II

A basic study on the possibilities to university education utilizing
Otsuma Women's University Museum Facility and the museum collections II

是澤 博昭¹, 下田 敦子², 中川 麻子³, 須藤 良子³
Hiroaki Koresawa¹, Atuko Simoda², Asako Ngagawa³, and Ryoko Sudou³

¹大妻女子大学博物館, ²大妻女子大学人間生活文化研究所, ³大妻女子大学家政学部ライフデザイン学科

キーワード：大学博物館，大学教育

Key word : University museum, University education

1. 研究目的

大妻女子大学博物館は、これまで主にその活動が展示公開と館園実習施設に集約されたために、博物館施設及び所蔵資料をととした学内教育への利用については必ずしも活発に行われてこなかった。

本研究は、生活文化という視点から人間の営みを解明するために文献資料とともに物質資料を照合し検証する研究に理解がある学内の研究者が集まり、大妻女子大学博物館の所蔵資料及び施設の活用と未来について多方面から検討し、本学の建学理念と今後の女子教育あり方を視野にいたし、将来取り入れるべき教育システムを構築することを最終的な目的とする。

これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議による「新しい時代の博物館制度の在り方について」の報告書（平成19年度）では、「これまで以上に大学と博物館の連携・協力を緊密にし、その内容を精査することが求められている。

大妻学院創設者である大妻コタカは、広島県に生まれ、和洋裁縫女学校（現・和洋女子大学）などに学び、明治41年、四谷に私塾を開き、それが大妻女子大学へと発展する。「自立し社会に貢献する女性」を輩出することを目標に、コタカは生涯を女子教育に捧げる。

そのような事情も手伝い、本学博物館が収蔵するモノは、本学の創立者大妻コタカと大妻良馬の生涯と大妻学院に関わる資料、及び卒業生や本学教職員より寄贈された、本学の女子教育の伝統を体現する手芸に代表される生活文化に関連する資料を多数所蔵している。モノは素材や形態などの物質的な側面とともにそれらがつくられた時代・地域・技術、さらにそれらに与えられた役割や用途、社会的な意味や価値など、文献資料にはあらわれない様々な情報を含んでいる。このような多様なモノに光をあてることで文献資料と照合し、多角的に考察することで、人々の生活や文化を複合的に検証し、明らかにする可能性を秘めている。従って大学博物館に収蔵された多種多様な資料を、できるかぎり大学教育の場で「活かしたもの」として学内で広く共有できる教育研究の基盤を形成することに取り組むことは、大妻女子大学博物館に課せられた、今後の使命であるといってもよい。

その第一歩として博物館学芸員養成課程にとどまらず家政学部をはじめとする大学の専門教育に貢献するために、前年度に続き本学博物館の活用の可能性をさぐるための基礎的な整理と検証をおこなう。

2. 研究実施内容

昨年度実施した他大学博物館の現状把握及び本学博物館の学生の認知度と利用実態等の研究成果を踏まえて、本年度は施設・所蔵資料を生かした学内教育・地域貢献へむけた実践的な活用の可能性を探った。

さらに本学資料をとおした女子教育への歴史的貢献を展示に反映させるための基礎的検証を行った。

本年の課題は以下の4点である。

1. 館園実習の成果もふまえて、博物館実習履修学生も参加する。加えて館蔵資料を活用し、地域貢献を視野にいたしたワークショップを実施する。
2. 所蔵資料を活用し、本学の女子教育への歴史的貢献を明らかにするための企画展示の可能性を模索する。
3. 博物館所蔵作品を用いて、授業やゼミ内で、学生対象のワークショップ、博物館資料調査演習、展示企の提案、展示練習、博物館イベント企画運営等を行う。
4. 実施後は、参加学生に対して博物館への要望・意見、アイデア等のアンケートを行う。学生の意見から、博物館の教育現場への活用法を検討する。

本学大学博物館における館園実習参加学生に、新所蔵資料で調査が完了していない西洋の装身具にかんする資料の取り扱いと、基礎的理解を深めるために協力するとともに、作品の調査書の作成、展示パンフレット等の作成指導を行った。

まず参加学生各自が学芸員・是澤とともに収蔵庫から資料を実習室に移動することで、博物館資料の収蔵状況を見聞し、実際に資料を取り扱うことで、モノに触れる機会をとした。

それを踏まえて

①所蔵資料の背景である西洋装身具の一部は中国・日本にルーツをもち、東西の文化交流のなか

でそれぞれの発展をとげたことに関連する講義を、中川が服飾史の立場から行った。

②須藤がそれらの資料を象牙・べっ甲などの素材の面から明らかにすることで、新収蔵資料の博物館的資料としての理解を深めた。

①②の事前準備を踏まえて、所蔵資料をスケッチすることで、資料の熟覧と調書作成との関連その意義を学ぶとともに、西洋装身具と本学博物館が多数所蔵する大妻学院の卒業生による裁縫手芸用品との関連を検証した。それをふまえて所蔵資料を活用した女子教育との歴史的接点を探った。

次に参加学生各自が日本の女子教育の原点ともいえる衣食住にかかわる生活に女性自らの手でかわる作業の一つが手芸と裁縫であることを確認することで、大妻学院在校生としての自覚をかんきするとともに、その歴史的な位置づけを参加学生各自が認識することで、1、2の課題の考察する準備を整えた。

それをふまえて館園実習では是澤・下田の指導のもとに、本学博物館が作を成した図録『大妻学院の原点—裁縫・手芸教育』の成果にもとづき、参加学生16名が3班にわかれ、同図録掲載資料と論考をもとに

1. 本学の館蔵資料を活用し学生が参加した資料の活用の可能性

を探ることを目的に展示案を計画するとともに、企画展示案を報告することで

2. 本学の女子教育への歴史的貢献を明らかにするための

課題の一端に取り組んだ。

具体的な展示名と目的は、以下の3点である。

1. 生活に彩を

家庭内での生活を華やかにより豊かにした彩をテーマに、大妻コタカが目指した女子教育の成果を学生の作品をとおして伝える。

2. 手作りのひみつ—心の美人になる—

裁縫手芸をとおして「作るだけが目的ではな

く、忍耐力・精神力を養い、本当の女子力を高める」ことを大妻コタカ先生は生活信条にしたという解釈の下に展示を構成する

3. 思いを紡ぐ—大妻コタカの教育の原点—

大妻コタカがなぜ裁縫と手芸を原点としたのか、女性の自立を目指す上での裁縫・手芸の役割とは何か振り返る。

地域貢献を視野に入れたワークショップ案としては

- ・身近にある手芸—3本の糸でミサンガを作ろう！
 - ・博物館のテーマである展示に隠された言葉をならべる
 - ・展示をみながらクイズに挑戦
 - 初級編 編み物作品と技法を点でつなぐ
 - 中級編 作品と道具を線でつなぐ
 - 上級編 作品に使われる刺繍の模様を刺繍見本から選ぶ
- などである。

3. まとめと今後の課題

これらの作業をとおして、各共同研究員間で問題意識と方向性を共有することができた。また学生の意見から、施設・所蔵資料を生かした学内教育の実践の具体案を得ることができた。

今年度の成果の一つとして、2020年4月に予定されている「常設展 大妻学院の手芸と裁縫」の展示協力、およびワークショップに学生のアイデアを具体的に取り入れる準備をすすめている。さらに博物館実習履修学生が地域貢献を担うための方向をさぐる準備を進めている。ただし実施後のアンケート等は、これからの課題である。